

---

# 白と黒

阿万之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白と黒

### 【Nコード】

N5668Z

### 【作者名】

阿万之

### 【あらすじ】

狂気の斧男はこの界限にいる。守口真人はそれを知っているし、友人の江藤魁もそうだ。斧を持った殺人鬼は、彼らの住む藤宮市のどこかに潜んでいる。それは紛れもない事実だ。

搜索は始まった。

## 真人の決意

狂気の斧男はこの界限にいる。守口真人もりぐちまことはそれを知っているし、友人の江藤魁えとうかいもそうだ。斧を持った殺人鬼は、この藤宮市のどこかに潜んでいる。それは紛れもない事実だ。

搜索は始まった。

斧男、アックスマンは突然藤宮市とその周辺近隣の市町を騒がしてきた。斧男についてわかっているのは、男女問わず、老若男女誰彼構わず殺すということ。凶器は斧だということ。そして男だということ。以上だった。

真人が中学生になった頃だ。第一の殺人事件が藤宮市金須野区域で起こった。場所は真人の家から八キロほど離れた場所で、真人もあまり向かわない場所だった。遺体は斧で何度も何度も刺されていて、酷い有様だったらしい。

それを皮切りに、恐怖が始まった。斧男は蛮行を重ね、真人が高校二年生になるまでに六人殺した。模倣犯の可能性はなかった。特有の殺し方は本人でしか再現できないものだと言われたからだ。その四人は金須野区で起こった事件ではないが、どれも藤宮市で起こったことだった。

真人は思った。これは由々しき問題だと。

## 真人の決意 2

「で、お前はこれ以上斧野郎を野放しにしておくわけにはいかないから、奴を捕まえるために俺に協力してくれ、と。そういうことですか」

「うん。頼むよ魁」

「ばか」魁は冷たく返した。「俺はそういうやばいことはしたくないんだよ」

友人である江藤魁は高校に入ってから付き合いたが、不思議と馬が合うのかいつも一緒にいて、今では一番仲がいい生徒だった。

「頼むって。魁だってこれ以上殺人事件が起きるのは嫌だろ？」

「いや、俺は自分に被害が及ばなければ良いんだ。いいか、奴は今まで金須野と周りの町を襲ってきた。この金須野地区でも殺人はあった。この藤宮市全体が奴らのテリトリーで、そして奴はたぶんこの市に住んでいるんだ。だいたい一七八？に総人口が約十四万。確率的に考えれば俺が死ぬのは十四万分の一。勿論これは市内全域が範囲の場合だけど。遭遇する確率は一パーセントどころじゃないのな。大丈夫。俺が死ぬ心配はないっていうことです」

真人は思う。これがほとんどの人間の考え方だろう。もう何人も死んでいるというのに、自分の周りには何万人も人がいる。だが、宝くじに当選するよりも高い確率で殺されるということをわかっていないのだろうか。

「無理強いはしないさ。できれば協力してくれれば有り難いってだけで」

「なんで急にそんな正義感に目覚めたんだよ」

「なんとなく。ただ、これ以上殺人事件がこの市内で起きるのってただ事じゃないよなって思ってた」

「警察に任せるのが一番だと思えますけどねえ？」

「警察が今までなにしていたって話さ」

「そうはいつでも、俺らが出向いてもどうにもならんよ」魁は話は終わりだといわんばかりに前を向いてしまった。

魁の協力が得られるとは思っていなかった。それはたぶん、魁が非協力というわけではなく、真人が本気で殺人鬼を捕まえるなんて無茶をやるなんて思っていないからだろう。

だから、独りでやる。最初は全て独りから始まるのだ。そういうものなんだ。

最初は放課後に行動に移すつもりだった。しかし、今の真人は滾っていた。放課後まで待てる余裕はない。それに夕方から探索というのはどうも危険な感じがする。すぐに夜になってしまっし。なので真人は保健室に赴き、風邪だと偽ると許可をもらって学校を出た。まずはどうすればいいか。時計を確認する。まだ正午にもなっていない。時間は十分ある。

殺人鬼の痕跡を見つける。そうだ！だがどうやって？ そんなものは警察が調べているに決まっているじゃないか。

警察に情報を求めるといふ選択肢があればいいのだが、残念ながら警察は高校生の探偵気取りに情報を流すほど甘い組織ではない。警察に知り合いでもいればいいのだが、あいにくそんなコネクションはない。

やはり魁の協力が欲しい。魁はいつもなんだかやる気のなさそうな人間に見えるが、興味さえ持てば誰よりも凄い。

深く息をつく。まずは殺人のあった現場に行ってみよう。これは基本だ。一番最近殺された人の現場に向かおう。真人は自転車を走らせた。

現場にはすぐについた。二ヶ月前に起きたことだった。一人の老婆が昼さなか、ミスターアックスマンより斧の洗礼を受けた。杖をついた老婆の周りには誰もいなかったのだろう。背後から斧の一撃。それから再び。さらにもう一撃。それから止めに頭部に一撃。

頭が痛い。想像するだけで不愉快になる。こんな痛ましいこ

とはない。何故自分よりもずっと弱い存在に凶器を持ってまで襲いかかることができるのだろう。信じがたい。鬼畜の所行だ。

道路のすぐ隣は線路になっている。場所を見るに、どうみても殺人を行うには目立つ。周りは住宅が多いし、全く人気がないという場所では全然ない。

斧男は神出鬼没だと言われている。まさか。化け物じゃあるまいし。

アスファルトに滲む血痕の後はもう微かになっているが、確かにあった。

風が強く吹いてきた。真人は身を震わせた。寒さからではない。なんだか怖くなってきたのだ。斧男が近くにいるような想像をしてしまう。早いところこの場を去ったほうがよさそうだな気がして、真人は自転車にまたがった。去る間際、何か得体の知れない殺気のような、今まで感じたこともない怪しい気配を感じた気がして、真人は自転車を強く漕いだ。

次に向かったのは真人の知っているもう一つの殺害現場で、もう四年も前に起こった事件の現場だ。斧男は背後から不意打ちで殺すのも好きだが、堂々と姿を見せて真正面から頭をかち割るのもお得意だ。四十二歳のアルコール中毒の男はそうやって殺された。日頃家族に暴力を振るって疎まれていた存在だったようで、家族にとっては斧男は救い主のようなものかもしれない。だが殺人は殺人で、極悪にもかち割った頭をさらに何度も何度も斧を振るっている。飛び散った頭蓋、脳が辺りに散乱したことだろう。

現場付近はのどかな田舎風景で、畑へと続く舗装されていない道が殺された場所だった。

わからない。このこと先ほどの場所を、点でつないでみるが、共通点はさっぱり見えない。五キロほど離れている場所だ。どうしてこんなところなのか。斧男は単独犯で、この藤宮市に住んでいる可能性が濃厚だ。

真人は首を振る。わからないことだらけだ。殺害現場の関連性は藤宮市ということだけ。しかし場所は離れている。無差別殺害だと警察は断定しているし、そうなのだろう。周期的に殺人を起こすというわけではない。殺人と殺人の間の時間に法則性はない。

今日はここまでにしておこう。明日にはいい知恵もわくかもしれない。

まだ夕方になったばかりだ。帰るには早いかもしれないが、真人は殺害現場に行くことで斧男のことを身近に感じてしまい、怖くなくなってしまったのだ。

## ミスターキラ

連続殺人鬼斧男は、三ヶ月ぶりに獲物を狩ろうかと思っていた。

彼はそうなのだが、いつも思い立ったが吉日生活という言葉のように、突然思い立つと行動を起こす、ということが実に多い。彼は殺人鬼ではあるが、普段は温厚で、とてもよくできた好人物であると周囲から評価されている。

斧男はマスクを被るが、一応である。彼はその気になれば誰にも見つからずに対象を死に至らしめることができるし、事実今まで見つかったことはほとんどない。一回だけへまをやらかして子供に見つかったことがあるが、その子供はやむなく殺した。気が乗らなかつた。というのも、殺人衝動なく殺すという行為は実に狂った行だと彼は思っているからだ。全ての事柄がそうだ。仕事もそう。車に乗るのもそう。人間は、ノリに乗っていないと行けない。そうしないと、全てがつまらなく感じてしまつて、何もかもが空しくなってしまう。暗く、空虚。それなら死んだ方がましだ。

殺人も楽しみの一つである。だがこれはかなり気を遣う娯楽だ。まず、決定的なことがある。これは法に触れるということ。そして世間一般的に、これはもつとも重い罪の一つだと思われている。

だから人目に触れるのは絶対に避ける。そして決定的な証拠を残さない。この二つは自分の能力を使えば、容易に解決できた。だから、斧男は今まで警察に捕まらなかつた。

この藤宮市は狭い。だから、慎重に、警戒しながら一杯娯楽を楽しむ。この能力を使って。つまるところ人生は楽しむためにあるのだから。

斧を手にする。愛用の斧は手入れを怠らない。血は刃物を駄目にするから。

さて、準備はできた。もうじき日が暮れる。夜になるとなんだかモチベーションが保てなくなる。その前に出かけようとしてしよう。き



## 接近者

次の日、一面での連続殺人鬼再びの文字に、宮崎市民は当然、恐怖のどん底へとたたき落とされた。何より今までとはスパンが短い。いつもは一度殺人があつてから次の殺人までに半年以上はあつた。しかし今度は三ヶ月だ。

警察は総動員で躍起になつていて、市内いたるところにパトカーが見えた。彼らもプライドや体裁を守るために必死になつていた。何が何でも斧男を逮捕する。市民も眠れない夜が続きそうだった。しかし何故、こんな大した規模でもない市街に凶悪な殺人鬼がいて、そして何故今もなお捕まつていないのか。住民も警察も疑問だった。

「な、言つたらう？ あいつは野放しにはできない存在だよ」 真人は魁に言った。

「ああ。確かに。この町、ちょっとした有名所になつちやつたもん。連続殺人鬼が住んでいるかもしれない町だもん」

「俺とお前で見つけてやろうぜ」

魁は顔をしかめ、茶色い髪をいじつた。

「そりゃあ、協力はしてやりたいけどさ……実際、どうすればいいつていうんだよ？ 前も言つたけど、俺達ができることなんてとつくに警察がやつてるんだぞ」

魁の言うことは至極もつともだと思つ。昨日のこともそうだ。現場にいつて何か手がかりを掴むなんて自分にはできない。しかし、また殺人が起きた。警察は必死だろうが、結局また犯人を特定することはできないだろう。そんな気がする。今までがそうだったように。

「だけどこのまま任せっぱなしなんて俺にはできないよ」

「好きにしるよ」

いいさ。お前がそういうのなら、俺一人で奴を、ミスターキラールを捕まえてやる。

今回は昨日の夕刻に起きた殺人事件現場にきた。まだ新しい事件現場なので、警察の数が多く、現場には近づけそうにない。テープも張られている。本格的だ。

殺されたのは十八歳の男子高校生で、藤宮市在住ではなく、学校帰りに買い物に寄っただけのようだ。背後から斧で滅多刺し。哀れな話だ。

ここにおいても自分は用はないのだろう。警察に任せ、警察が見つけれないのなら、誰も見つけられない。それが当たり前だ。その場を去る。

魁の言うとおりだ。もうこのことは考えまい。殺された人間は哀れだが、運がなかったのだと割る切ることだ。

黒髪の少女が立っただけでこちらに微笑みかけている。最初は誰か別の人を見ているのかと思った。しかし、どうみても目線のほうを向いていたので、真人は困惑した。彼女を知り合いの誰か、クラスの女生徒の一人かと思いついてみたが、クラスの生徒にも今までの顔見知りにも該当者はいなかった。

「君、ミスターキラールを自分で捕まえようとしてるんでしょ？」  
超能力者か何かだろうか。

「君は誰？」真人は尋ねる。  
「同じ目的を持って一人だよ。もう一度聞くけど、ミスターキラールを捕まえようとしてるんでしょ？」

彼女はよく見ると自分とほとんど同じ年くらいに見える。一体彼女が何者なのか知らないが、こちらの意図はわかってるようだ。何故なのかはわからないが、そういうことなのだろう。

「そうだよ。だけどそんなのは無理そうだから、大人しく家に帰るよ」

「無理じゃないよ」

「何だつて？」

「あたしもあいつの正体を知っている。ミスターキラーは人間じゃない」

どうも変な相手に絡まれたのではないかと真人は思いつつも、過去にきいた噂話を思い出した。斧男は別世界からきた化け物だと。だから、警察には捕まえられないのだと。

「人間じゃない？」

「ミスターキラーは怪物なの。この世界に巣くう化けものたちの一人。それを倒すのは、あたしやあなたのような異端者の使命なんだよ」

背後では警察たちの喋る声が聞こえてくる。風は優しく吹いていた。この女は何者なのかかわかないが、守口真人は、不意に、強力な味方を得たのでは？ という希望のような気持ちが芽生えた。

それから、変人と関わりたいないという拒絶感も。

それで結局、関わりになりたくないという気持ちが優ったようだ。真人は自転車に乗ると、何も言わず少女に背を向けて走り去った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5668z/>

---

白と黒

2011年12月19日22時56分発行